

2022年9月21日

## 「SDGs」と地域の生態系（その2）

はじめに

2015年9月の国連総会において全会一致で採択された通称SDGs。日本語では「持続可能な開発目標」ということですが、地球規模で成し遂げるべき、この「SDGs」を進めるに当たり、経済学者、思想家、科学者等、各界の有識者達のこれまでの理論に整合性はあるのか。また、異なる意見を相いれることができるのか？これら意見の相違や利害の得喪を克服しなければなりません。

つまり、SDGsの取り組みは、これら諸々の問題提起や利害を踏まえたうえで、国家間はもちろん、すべての自治体、地域及び企業・団体・組織等が一体となって2030年を目途に必ず実現しなければならないわけです。

### 1 地域の生態系を再生する

生物学者の福岡伸一氏が、著書「生物と無生物のあいだ」の中で生物（生命体）と無生物（機械）の違いを説明しています。

生命を構成するタンパク質は絶え間なく製造され、排出され、少しずつ入れ替わりながら、一定のバランスを保っていて、このバランス状態を動的平衡と呼びます。

そこで「地域は生物なのか、無生物なのか」という問題が問われますが、福岡氏は、新宿のゴールデン街を「生命を感じる地域」として挙げています。

地域を構成する要素は互いにつながり、機能を補い合い常に少しずつ入れ替わりながら、一定の平衡状態を保っている。つまり「地域は生物（生命体）なのだ」というのです。

福岡氏は

○ ある店が閉じ、新しい店が入る。昔からの客の足が遠のき、新しい客が訪れる。古い客が新しい客を連れてくる。古い関係の中に新しい関係が生まれる。そんな相互作用を通じて、時代の変化に適応しながら進化した結果が、現在のゴールデン街なのだ。

○ 排他的に新しい店や客を閉ざしていたら、代謝は進まず、時代の変化に取り残され死に絶えていただろう。

再開発ブームに飲まれ、新しいビルに建て替えてしまっていれば、古いものと新しいものの相互作用がなくなり、全く別物になっていただろう。

と続けています。

前段のゴールデン街の例は、まさに SDGs の神髄としての未来から考えるバックキャストイングの「生きた地域」であり、未来志向のアプローチなのです。

一方、後段の「相互作用がなくなり、別物になる」という排他的で、何もかも解体して一から始める再開発は、ジェントリフィケーション（高級化）に例えられるエゴなフォアキャストイングの開発であり、無生物として死に絶えていく「弱者切り捨ての再開発」というほかないのです。

（筧裕介著「持続可能な地域の作り方」より）

## 2 SDGs の定義に適った地域の再生

イタリア出身の理論物理学者 カルロ・ロヴェリは、「文化とは、経験や知識、そして何より他者とのやり取りを糧として私たちを豊かにしてくれる果てしない対話なのである」と言っています。

最近、大企業、団体、行政の間で「ダイバーシティ&インクルージョン」という言葉が、飛び交っていますが、インクルージョン（Inclusion）とは、英語で「受容」という意味があり、多種多様な人々が互いに考え方の違いや個性の違いを受け入れながら、ともに成長することで、共存共栄することが、ダイバーシティ&インクルージョンの特徴なのです。

つまり、ダイバーシティ経営とは、経済のグローバル化や少子高齢化が進むなかで、企業競争力の強化を図るための施策です。

それは、LGBTQ はもとより女性、外国人、高齢者や障害者を含めた多様な人材を生かし、その能力が最大限に発揮できる機会を提供することでイノベーションにつなげて行こうとするものです。

まさに地域の「点」を「線」でつないで、生物としての生きた「面」となし得るには SDGs の神髄である「誰一人取り残さない」ための「他者との果てしない対話」が求められているということなのでしょう。

### \* ジェントリフィケーション（gentrification, 紳士化）

地域における居住者の上位化とともに、建物の改修やクリアランス（再開発）の結果としての居住空間の質の向上が進行する現象のこと。

### \* ダイバーシティ（Diversity, 多様性）

集団において年齢、性別、人種、宗教、趣味嗜好などさまざまな属性の人が集まった状態のこと。もともとは人種問題や雇用機会の均等を説明する際に使われていた。

以 上